〔泌尿紀要13巻7号
昭和42年7月〕

泌尿器科紀要

第 13 巻　第 7 号

昭和 42 年 7 月

随　想

自然ということ

京都大学名誉教授　平　沢　　興

この度加藤篤二教授が広島大学から京大泌尿科学教室へお帰りになったことは，母校の教室に盤石の重みを加えるもので，かねてから同教授に対して敬愛の念やまざる私としてはまことによろこびにたえない．学問的のことは私には発言の資格がないので，随感の一文をよせて，祝意にかえたい．

○

昨日私は所用があって，昼食時のひと時を都ホテルで過した．ほんのひと時であったが，長らく待望されていた雨も降り，東山の緑はひときわ美くしく，目もさめるばかりであった．つい先日5週間ばかりの欧米の旅を終えて帰ったばかりの私には，その印象は格別であった．

柔かい山々の曲線，南禅寺の森から比叡山まで幾重にも近く，また遠く重なりあった山容，緑といっても濃淡いろとりどりの組みあわせ，どの木を見ても思うがままに伸びながら，しかも全体としての美をつくっているおおらかさ—いかにもこれは日本の美であり，わけても京都の美で，ここにはまさに京都の自然がある．同じく自然の美といってもいろいろで，たとえば京都の山とスイスの山とでは違うのである．

○

一体自然とは何であろうか．かつて私はわかったような気がしたこともあるが，またこの頃では考えるほどにわからなくなった．どうも自然などといっても，ちよっと考えるよりも，実ははるかにむずかしいことのようである．今度もある日曜日の朝パリーのルクサンブール公園を訪ねて，しみじみその感を深くした．よく手入れがしてあって，どの木もみなすくすくと伸びている．木の性質によってある木は高く，ある木は低くしてあり，またある木には防腐薬が施されたり，また大きな枝がきりとられたりしている．それは決してあるがままに手を加えずに伸ばされているのではなく，それぞれの性質に従って最も無理なく生長し，繁茂し得るように世話されているのである．あるがままに放置されたのでは虫に喰われたり，下枝が多すぎたりして，逞しい成長はできないのであるが，そういう邪魔を人間がその経験から知って，手を加えているわけである．

それでは自然を殺しているかといえば，決してそうではなく，自然を殺すどころか，ある意味では最も自然を生かしているわけである．つまり放置の状態では，外部からの障害や，力の分散などで十分成長の出来ないところを，人間の経験からこれらを取り除いて，本来木自身が持っているポテンシアルを最も無理なく生かしているからである．こんなことを事新しく書くのは間がぬけておるかも知れないが，私にはまことに面白く，あらためて色々と考えさせられたのである．

全く外から手を加えないのもある意味で自然であろうが，そういう自然だけでは，それが持つ本来のポテンシアルというか，その潜在的な可能性というか，とにかくそういうものを完全には伸ばし得ない．聞くところでは，とかく素人は原始林などといえば，天を摩するような大樹のみがうつ蒼としているように思うが，実際はむしろそうではなく，普通にはむしろあまり大きな木はなく，それは風とか害虫などのために木があるところまで伸びると，自然に枯れるためだとのことである．もとより原始林のなかでも天を摩するような大樹もないではないが，それは特に素質に恵れた例外的の存在である．

こうして考えると，自然といっても，全く手を加えないままの一次的の自然と，外から手

を加えながらもその本質的なものを生かしている二次的な自然とがあるわけである．これを生物の素質と環境という風に抽象化してしまえばそれまでのことで，あまりにも平凡なことであろうが，しかし，少くとも私自身には今でもそれほど自明のことではなく，多くの疑問があるのである．

○

そんなことを思いながら木々を眺めているうちに，私はいつの間にか人間のことや自分自身のことを考えずにはおれなかった．ていていと伸びる木が自らを知らぬように，人間とてもある意味では同じではあるまいか．いかなる人間も自らの素質を知りつくしているなどという者はないのだが，そういう素質とか環境とか，教育とかのおかげで今日の存在があるのである．平素は忙しくて，こんなことをしみじみと考えることもなく，またそんなことはあまりにも自明のことだとも思われるかも知れないが，私自身には決して自明のことではなく，自らの今日の存在そのものが不思議なのである．たしかに私は一人の人間であり，人間としての存在を許されているが，一体私自身の私とは何であろうか．健康状態において自律性諸機能を自覚し得ないことは暫く措くとしても，広義の意識そのものも大部分は自覚し得ないことを思うと，いよいよ以て私自身も，私にとって不思議な存在である．

たしかに人間は複雑な存在である．「自然にかえれ」とルッソーが叫んだとしても，もとよりそれは動物にかえれとか，原始人にかえれという意味ではなく，教養ある人間として自然にかえれ，ということであろう．しかし，その自然とは何であるか．それは今日においてもむずかしい問題であり，ある意味では文化全体の問題であろう．もとより人間は動物としての自律的，原始的な一面を持ち，しかもこういう一面を持ちながら，これらの働きを昇華して霊的な他面を具え，かくて人間社会をつくって今日に至った．直立猿人から数えても僅か50万年で，10数億年の生物史から見ればまるで一瞬の存在に過ぎない．しかし，一惑星上のひと時の旅人に過ぎないこの人間には不可思議霊妙な思考能力が与えられた．人間は無数の生物中で，深い思考力を与えられた唯一の存在である，かくて人間は，一面本能と霊性との間にはさまれていろいろ苦難と煩悶との間をさまようが，しかし，考えようによっては，そこにこそ人間生活の楽しみも面白さもある．せめてあまりにもこざかしい，神経質な存在にはなりたくないものである．むずかしいが，やはりできるだけ自然に生きたい．人間における自然，もとよりこんな難問題に対して，ここで明快な解答を与えるなどということはできないが，生きている以上，これは単に哲学者にまかしておいてよい問題ではなく，われわれすべてにとっての問題である．せめて今日一日が自分にとってよい一日であるのみならず，他の人々にとってもよい一日であるように生きたい．有限の人生ではあるが，現在共に呼吸しているもの，そしてまた後につづく人間が少しでもよりよくなれるような生き方をしたいものである．いかなる聖賢も分かりきって死ぬとか，完全さを身につけて死んでいくのでなはく，有限の与えられた生命のはてにおいて生を終るのである．問題は無限に残されたままのようであるが，あとには信頼すべき人類の世界がある．

○

人間の生き方にはいろいろあるが，先人の生き方を知ることもそのよきよすがの一つである．本年の京大70周年の記念式典で，古典の田中秀央先生にお会いして，たまたま歴史 History の語原について聞く機会を得た．これはギリシャ語の Historia からラテン語をへて，英語になったのだとのことだが，本来は研究とか，研究して学び取る，とかいう意味だそうである．とかく，歴史などというと過去の記録のように思うが，歴史は本来ただ過去のことを知るということに重点があるのではなく，むしろ今日をいかに生きるかということのために過去を研究し，人間の生活を学びとることにより大きな意義があるのである．英国の名医 John H. Huxhan (1694～1768) はその名著「熱に関して」なる著書の序文に，医師が医学の歴史を読む必要を述べて，「古書を読まねば良医たることが出来ないというのではなく，これを読むことによってよりよき医師となることが出来るといいたい．……これは医術のみならず，他の芸術においても同じで……古人からわれらが学ぶものは，彼等の絶大なる努力と不断の勤勉とである」といっておる．

まことにその通りであろう．限りある人生において限りない夢を持つということは，あるいは人生の悲劇だという人があるかも知れないが，私はそうは思わない．むしろ私は，そこにこそある意味で人間の自然があり，そこに人間活動の根源があるようにさえ思う．しかし田中秀央先生がよく引用されるように，Festina lente ゆっくり急げ，である．